

平林治徳

物語日本文學

大

鏡

至
文
堂

昭和二十八年七月二十日 印刷
昭和二十八年七月二十五日 發行

物語日本文學

大 鏡

定價金貳百參拾圓

著 者 平 林 治 德

發行者 東京都新宿區拂方町二七
佐 藤 正 叟

印刷者 東京都千代田區神田神保町一ノ三三
山 村 榮

東京都新宿區拂方町二七

發行所 至 文 堂

電話九段(33) 四一五番
振替口座東京二九五〇七番

(同興社印刷)

は し が き

本書は大鏡の梗概と鑑賞と批評とを交へたやうなものです。大鏡の口語譯としては古く芳賀矢一先生の口譯大鏡があり、近くは橘純一氏の名著大鏡通釋も出て居る事であり、且つ物語日本文學としては嚴密な現代語譯をするのはその趣旨でないと考へるので、さうした態度は採りませんでした。

氣樂に讀めるもので、自然に大鏡の内容がわかり、本文を讀んで見ようといふ氣を起させる事が出来ればと思つて筆を執つたのですが、何分多忙の最中、短時日に纏めたので理想通りに行かない事が多く、恥しく思ひます。

どこまでが大鏡の梗概で、どこからが編者の詞かわからないとの批評もあるかも知れませんが、通讀して下されば自ら區別がつくやうに書いたつもりではあります。本文を引いた部分には『を附しておきました。

かうした態度から本文の順序を入れ替へたり省いた部分もある事を御承知願ひます。

昭和二十八年七月

目次

序	一
帝記	七
五十五代 文德天皇	七
五十六代 清和天皇	七
五十七代 陽成天皇	八
五十八代 光孝天皇	八
五十九代 宇多天皇	九
六十代 醍醐天皇	一〇
六十一代 朱雀天皇	一一
北野の祟り	一一
六十二代 村上天皇	二三

六十三代 冷泉天皇 三

六十四代 圓融天皇 四

六十五代 花山天皇 四

御出家前後 五

六十六代 一條天皇 八

六十七代 三條天皇 八

桓算供奉の物の怪 九

六十八代 (今上) 後一條天皇 一〇

帝王系圖と道長 二

列 傳 五

左大臣 冬嗣 五

太政大臣 良房 五

攝政の初 五

良房和歌を嗜む……………二六

右大臣 良相……………二七

權中納言從二位佐兵衛督長良……………二七

太政大臣 基經……………二六

光孝天皇と良房……………二六

左大臣 時平……………二九

菅公左遷……………二九

時平奢侈を禁ず……………三七

笑ひのとまらぬ時平……………三八

左大臣 仲平……………四〇

太政大臣 忠平……………四〇

忠平鬼を威嚇す……………四一

太政大臣 實賴……………四三

端正なる實頼……………	四三
佐理卿神に書を所望せらる……………	四四
太政大臣 頼忠……………	四四
頼忠儉約に過ぐ……………	四四
公任卿秀才の事……………	四七
左大臣 師尹……………	五〇
絶世の麗姿宣耀殿の女御……………	五二
右大臣 師輔……………	五五
西の宮殿左遷と藤氏の策謀……………	五七
師輔、百鬼夜行に遭ふ……………	五九
元方の民部卿怨靈の事……………	六〇
夢合はせの事……………	六三
太政大臣 伊尹……………	六三
後の少將義孝一生精進の事……………	六三

行成藏人頭に拔擢せらる	六
頭争ひ	六
行成秀才の事	七
太政大臣 兼道	七
御母后の御墨附	三
朝光の財産結婚	五
兄弟の確執	九
太政大臣 爲光	八
太政大臣 公季	八
太政大臣 兼家	三
夢解き	三
右大將道綱の母	四
内大臣 道隆	七
酒豪道隆	七

不肖の子伊周	九〇
氣丈の隆家	九七
右大臣 道兼	一〇〇
腕白小僧福足君	一〇〇
太政大臣 道長	一〇二
道長の榮進	一〇二
道長對伊周	一〇四
道長の子女	一〇六
日本一幸福なる女性倫子の方	一〇九
高松殿の上明子	一一一
顯信出家と乳母の眞情	一一三
道長の出家	一一三
道長の詩歌	一二四
少年時の豪膽	一二九

道長の人相	一四
道長の容貌風采	一五
道長對伊周	一四〇
女院の御庇護	一四一
藤氏の沿革	一五二
氏神氏寺の事	一五六
後の宮の御父及び外祖父の事とも	一六二
無量壽院建立の事	一六三
無量壽院供養の事	一六六
出家漫談	一七三
世繼の豫言	一七五
昔物語	一七九

目
次
終

大鏡

序

先頃、雲林院の菩提講に参詣した際、すばらしく年取つたお爺さん二人と、一人のおばあさんが來合せて話を始めました。

世繼昔の人に會うて世間の見聞を話したり、唯今の入道殿下の御有様をも申し合はせ度いと、長年思つてゐましたが、あなた方に出會つて今日は實に嬉しい。これで、あの世へも心残りなく出掛けられるといふものだ。云ひ度い事を言はぬと腹がふくれるといふが本當ですね。昔の人が、物が言ひ度くなると穴を掘つていひ入れたと申すのも尤もだと思ひますよ。今日の對面は實に嬉しい事だ。それにしてもあなたは何歳になられましたか。」

といふと、もう一人の老翁が、

繁樹「何歳といふ事は覚えて居りませんが、私は故太政大臣貞信公（藤原忠平）が藏人の少將をして居られた頃の小舎人童でした。あなたは母后の宮の召使で、有名な大宅の世繼といふ方でしたね。すると、あなたは私よりよほど上ですよ。私が十四五の小童の時にあなたは二十五六の立派な大人でしたからな。」

世繼「さうく、さうでしたね。して、御名前は？」

繁樹「太政大臣邸で元服の際、貞信公が、汝の姓は何と申すと仰せられましたので、夏山と申しますとお答へしたところ、それぢや、繁樹がよからうと仰せになつて、夏山の繁樹と付けて下さいました。」

などと話して居る。貞信公の若い頃と云へば百二三十年も前の事で、驚き入つた爺さんである。

一座の人々は興味を以てこちらに眼を向け、老人の方へ寄つて來たりしたが、その中で、廿歳位の青侍が、

青侍「面白い事を仰しやる御老人ですね、こちらの御老人は年を御記憶ですか。」

世繼「知つてますとも、百五十歳になりましたよ。それで繁樹は百四十は越して居るでせうが、謙遜で覺えないなんて申すのですよ。私は清和天皇御退位の年、貞觀十八年の正月十五日に生れましたから、十三代の御代に逢つたわけです。よい年ですな。父が産衣に生年月日を書付けておいたのが今もあります、丙申の年ですよ。」

といふのは満更うそでは無いらしい。

世繼「さても嬉しい對面ですね。そこにゐられるのは昔の奥さんですか。」

繁樹「いえ違います。それは早くに亡くなりまして、これは後添ひの女です。あなたの奥さんは？」

世繼「私の方は昔からの妻です。今日も一緒に出掛けようとしたが、瘡を煩ひまして、今日があたり日で、よう参りませんで残念でした。」

かくて講師の出席を待つ間、随分長くて退屈なので、世繼の翁が、

「退屈ですから、どうです、昔話をして、一座の人々に、昔の世はこんな風だったといふ事をお聞かせしようではありませんか。」

といふと、繁樹も

「そりや面白い、さああなたからお話しなさい。私もそれに就いて記憶を呼び起して口を出ませう。」

と、いづれも如何にも話し度さうな様子、私達も早く聞き度いと誰も興味をそゝられたが、青侍は最も熱心に相鎚を打つてゐた。

世繼「本當に世繼が話し度く思ふ事は外でもありません。唯今の入道殿下(長)の有様が、斷然世に勝れてゐらつしやる事を、道俗男女の御前で申さうと思ふのですが、自然多くの帝・后・大臣・公卿の御身の上をお話しする事になります。世間の攝政關白といひ、大臣・公卿と云へば、皆、この入道殿下のやうだと若い人達は思ふでせうが、中々どうして大間違ひ、入道殿下は世の幸ひ人であり、心構へも格別であらせられるのです。」

神代七代はさて措き、神武天皇以來今上迄六十八代、神武天皇を始め奉り、御歴代の事をお話しするとよいのですが、それはあまり、耳遠い話ですから、近い頃の文德天皇以後の事を話させうが、今上まで十四代、年數は文德御即位の嘉祥三年から今年萬壽二年まで一百